近世説美少年録 初編 四

特へ適り
1279
4

1279
4

長州豊浦郡豊浦天神坊

村田

近世説美少年録第一輯巻之四

東都　曲亭主人編次

第六回

密使茶店ふ貴翰を傳ふ　美婦子を携て情人を送る

登時若黨佐三次ハ銭一ト緡をとり出ス乞丐ホふちに對ひ。ゑれ埜臥們汝ホゲ大膽ゐる。這道中ふ列臥して人ふ踏しと物ふまる。鈍ち彼倆ハ憎けれども神詣の以さそをハせず。施行ちゐで取らせ。ふるる檀那ハ沼くふ。ん口唖ぢふ受載ぢそ。ちく退ぢそ。と君ち。遽ち子ぢそ受取る霜遊茄六冷笑ひつゝ。

鄙太よ。蹈れて膳三枚折られて枝膏菜代ハ鋤百文でいろ。ハ。ぢ。怪貪慾悲吝嗇ゐる。ハふ檀那ハ寔ふ。ゐぐう。堪忍ゐる狡りふぞ。と問ふ鄙太ハ頭を掉て蒜公むこぢそとゐるのひと。世ふ捨られる俺們でも膳三枚蹈折られる。膏菜

代が鏹百ならバ無慙やな助一枚が三十二文と知られたり。あゝ野猪の胴殻照鮪の鹿
骨でも介ぶ時價が何処ふある。返してくれよ聴ぬぞよきゝぬくと臥ながら嘘も然
アゝと猪弥奴卒八鹹声を苛立く。噫蔬六が心弱さよ。物吝をせぬ檀那まあ
へバ寐ても寤ても世界ふ銭百で人の骨肉を買れんや。然るを受取るとやらは乞児冥
利ふ竭る欲適夥計の汚面奴がさぞび済ぬぞ済さぬぞと麪桶敲くを相
槌の調子外ぞの高揺揖。蔬六騒ぐぞ噫味やら氣信と按する鏹百ぞり
と口ゆゑバと一文檀那百人ふ貰ふバ都合ならぬ這一緡ハ優徳衆ぶ金百両ふも
當もるめを受もらで何とせん。蔬夥計で齢役る己ふ女才のある欲部
太よこれで堪忍せよ衆共侶ふ和解ぞそとひらても目を注まれバ氣色ふ暁
得る卒八猪弥奴不召とらバ陰陽笑して誠ふこれハ忝なり。縡を分る哥々の
差配で肋骨より氣が折れなん。鄙太も看際で往生せよとの不領く大

蒲團新あり去々歳まで一蒲團も寝かされし兄弟呂の寛解ならぬ恩
愛平瞽血を分けし風アそあれ根ならぬぞよろしく宜く圓く治る麪桶の商
ひ撞げて春嫌くぞ笑ひ蔬六も佐三次も對ひて目今皆せなが如し敵
てが町人百姓ならバそのまゝ脆く折れずぞ斯お腰ハ怕れて形のごとく衆皆納得仕
アなぞとくとかく世のためしとはいへ成る瀬十郎ふらバ汝ふのひぶんを無欲と同じ果
ぬは四箇の乞児ふかぞうにひぶへ郷尚の腹の立し随ふまゝし過して今から後
悔免きせぬぞ遂巡しぞ尽ひらく玉鉾の路の障りも凍解て縲と絶
夕南風頭痛病せ折奴もありたる佐三次も疾視回しハうべなど共ぶ
意氣揚々と主の後方に隷添ぶ齊一急ぐ間暮春の由断ぞ謀る四箇の
乞児ハ蔬の下に隠しる巨刀を引抜く声を懸けぞ後より窃歩して追
推てあびせ被たる刃の電光不意を擊れし佐三次折奴背の深疵ふ雲時も

沼堪忍苦と叫びて仆れる程もあらばこそ乞児ホい瀬十郎ちう籠に覽ひ撫
るを物ともせぬ古ろ絡うと身を淪して左右ホ近づく猪弥次と鄙太が刃どうち
落して怯むを透さず項上抓んで撞と投伏せ声咎り立て汝ホ乞丐ホ欲ばかる
刃を隠し命ばかりの前程せんとのゐなる弥然ちう人ホ頼れ狡と問せも敢ず
六卒八手目年奴よくも推しちう左でも右でも活て還さぬ世ちう引道ず意
趣の本末説示さえ本いとゆゑ色の仇笠屋阿夏ホ両箇の密夫一箇ハ和郎が
コヒ物貞ホ子さえ産して今一人の財主ホ空笠前を喫くる迷恨まのぐ雪ぐんとそ
憑れて扶昏間ち埋伏せしを表ざるや今の浮世の倒ぐ素人ホ施さと乞児のあ
うち受てもるのと調謔ホるぐ絶て両人齊一撃すんと戦世の習俗ゆゑ市人荘
客乞児ホまで只殺伐を旨とて土一揆ちうど喚れる兵法武藝を看做ず
悍らげりしのるければ瀬十郎ハ又さらホ問答の遑もるく刀を晃りと抜合して蹈

込くく戦ホ程ホ猪弥次鄙太も身を起し来て落ちる刃を掻取りて後
ち撃さんとて歩許ちう甲夜間ホ倒臥しる両箇の傷者ゆゑ撲地と咲ける
御音ホ佐三次折次ハ忽地ホ呼吸通て刀を杖ホ立むぐちう主を援けて猪弥次と鄙
太を撃んと投締ぶぐ隙ちう奮撃を突戦人来れる七口の鍔音高く丁々
發打と豆ホ鑢を削りちう勝負の間ホ佐三次ハ又卒八と戦ずちう砕伏せ
しゆゑの身も深疵ホ瞑眩ゆゑ再撞と倒れるゆゑ間ホ折次ハ鄙太が肩尖斫下
げく仆る処を乗し懸く十々滅を刺んとする程ホ鄙太ハ伏しちう刃を揚て折次が
乳の下を刀尖ぬく異然と刺を刺れるぐるも打次ハ鄙太が胸前刺串ゆゑ此彼
共ホ魂消る声を末期の一句ホく臥異りて死ぬ程ホ瀬十郎ハ名を猪
弥次と大疵を肩ゆゑ疲憊く処を畳りけく細頸丁と撃落して返ちうホ荒六が
向脛拂て薙倒せ背後ホ廻ホ鄙九郎声を被ず破と斫る刃を外ハ瀬十郎ハ

修羅の大刀風捲き去りて又鄉九郎と戰ふる一上一下虚々實々然れども烈
敵養の牙ふ鄉九郎が右の腕小髽の髮際彼此と既ふ深疵を負ひ難捷ト
と思ひけん透を顧みず脫ゝと足ふ信ゝと逃走るを瀬ヶ郎が脫さじとて友を
拭ひもあへず喘く追ふ程ふ遠く遠の里人ふ多く棒を挾み焦
火を振照ゝと群々と走り來る瀬ヶ郎を仰聞ふ呼ぶ罵ることと
罵騷ぐく頻ふ打擇ゝとけれが瀬ヶ郎が逃る奴をとられを狙撃るとて木人を
らんと思ふのあら勢ひ低地ふれが遂ふ亦追へ引提ゝ力を拭ひ歛ゝ里人ふ
這條の緯の趣如此々々と首より尾まで詳ふ報知ゝとれが管領家の御内人陶
瀬ヶ郎と喚るめゝ俱ゝなる両箇の役者あり一箇が死ゝ一箇も亦大疵に生
死定らぬ彼悪棍ふ頼れる四箇のゝ丐ふ討留るがゝ死ぬるもわゝ
誘共侶ゝと先ふ立ゝ舊所ふ歩ゝ來ゝ息る藏六を項摑ゝ抜捐

起ゝて緯の機密を責問ふ藏六苦痛ふ堪ぎゝて鄉九郎ふ頼れ言ふ役倆ふ
送ゝく首伏ふ瀬ヶ郎ゝ共ゝ人ふ悪事の本人ふ三條西町のゝ池澄
屋亀六とゝふの孫兒鄉九郎ふ云ふれ者奴ふ逃亡ゝれど既ふ深疵を
負せゝふ追捕ん三輙ふ成ゝ。ゝふ後者佐三次ふ幸ふ死ぬ涙ふの條
送ゝ置て里老達速ふ醫療を加へゝふ。ゝふ死ぬも活るも護ゝ
法をゝちゝかゝれ君所ふ立ゝ。ゝふれらのよゝを
俱ふ管領家ふまゝりゝと訟ふ撿屍の使ゝとゝらん夜の深ぬ間ふ
里人ふの説ふ任ゝ表立ゝるの西三人瀬ヶ郎ふ附添ゝ管領邸ふ赴遣
れる里人ふ佐三次ふ醫師を招ぎゝ療疑ふ物ゝ畫ゝ然程ふ管領大
内義興主ふ陶瀬ヶ郎興房と千本の里人ふ多ゝ夜猛ふ討ふ寄ゝ言の虚
実を問質ゝ則家臣朱野丹三ふ數兵を率ゝ千本の里人遣ゝ猶旦暇知紋

部と悪事の本人鄉九郎を捕捕るべしと命ぜらる。扨説木野丹三時を移さず宿所と覚く千本へ赴く程ふ彼処より十町ばかり路傍ふ鮮血に塗れく臥くるものあり引起さんと責問ふ則別人なりけれ。そが衣服を被きく千本へ奉ると来りしふ送れる里人ふを召聚へくよりと問ふ。御ふ瀬十郎ふ答へる。趣と違ふとなり。公ふ乞児荒六を深痍負れば堪ぎしとの暁くふ息絶たり。陶が若黨佐三次も霜露命危くなりしと丹三則里人ふ下知と使ふ扶無へり。折ふが屍と共ふ瀬十郎が宿所へ遣へ遂ふ鄉九郎を擒へ次の日鄉九郎を糺問せるふ則陳ト申ふ及ぶ。在下ふこの年来陶瀬十郎ふ恨をあり且そのよりまもなく来松木偶ふとふ河原人ふ笠屋頁が良人ふ在下が親亀六が借屋ふをり。公ふ御内人陶瀬十郎ふ件の頁と密通へ。産へる子ふ二子ふ有れり。この事誰とく者ふ及ぶるを。木偶ふが管領家のあん威福ふ憚りて阿容々

とて做とるをそのと朽をく腹立へ在下借屋の妻敵と渠が為ふ妻敵敵を沒さんと欲せども多ひとりゆえの力及ばずして四箇の乞丐ふを頼まを助剣をせれども反撃ふ撃ふ果されて在下さふ深痍を肩ふ負ふの外ふ情由ふ及ぶ丹三冷笑ひく借屋の好ありとて。そが良人ふ意趣を述ふ人ふ憑ふ妻敵ふ味方なふ烏滸の癖者と叱懲へ木偶ふとそが妻頁と召へて鄉九郎が陳ずふ縛の趣云云と詳ふ説示へくこのよふ汝ふ覚やあると問へ木偶ふ頭を擡くそれるがもの上へ陶瀬十郎とふふ者ふ在下ふまをこれを知らざるを鄉九郎が云云とまうすをあらるるとふふ丹三領ふく公ふが頁ふふ阿容々と問れて阿頁ふ阿容々ふ色ふく問せるとふふ結れどそを濡衣を被せんとすへ人の虚言ふ偽ふ四稔前ふ比鄉九郎が妾を奪へく者ふ口説へそが度毎ふ窘へく情へ物せ程ふ鄉九郎ふ頁ふ程ふ鄉九郎ふ頁ふ親亀六が勘當せるを京師ふ

をもぎとり傷り然るを要り屈く免されて喚くされて幾日もあり風ふ何を證ふ云云也。
支を好と一間毅ふい物狂ひ出あらんぞちん出ひうけるを禍鬼のいつも是れく給る
る願ふい察しまうと屈く傷ふ牽居られる鄭九郎をたくま證据るけれ悪
根もを非とい爭ひくく頭を低く跪居ろ登時丹三声高ふ呼ぶ鄭九郎
笞ろ狡辯ば夏ふ不誼ありとも汝が妻ふあらぎるふ非法の勸紀言語同断況や
不誼の證据るーされば是れ木偶父瀬十郎を知らぬとは出さ汝が情慾浅
沼遂ぎりけん送恨ふよりて咎るものと誣こるあんこれ亀六を召よりて牛来汝が
放蕩無頼の趣さふ定るる知ぬ今飽まぞふ歐懲ぎいふく実を吐くべ死。
そく彼奴を歐ぎと烈しく指揮ふ雑兵ふ羅ろと立ぬ出て鄭九郎を推伏
せく笞を揚く背の皮肉の破く迫ふ歐しば弱り果てさぞ在下ふ四総前
より阿夏ふ舊ふ怨あり乃若人の噂よりて涙ば心の変アーる瀬十郎殿と

情由ある故を報こる者のありしば。是恨の累ぞ。ふ先彼人を廚
毅ふ者。後ふ阿夏を殺さと計較しふ現蹤忽の術ぞ。義ふ相違ぞ。
孤く首伏ぎりけり丹三ぞ。ふ人ふ陶瀬十郎ばるいけ夏ふも亦罪ふ。
人の噂を実るとして管領家の御内人を毅るんとする大膽不敵その罪尤軽ろ
ぞ。木偶父夏ホ千本る里人も食ぞの意を沼よとふ品厳ふ怪え者ーく。身れ
暇をぞ与せろ。鄭九郎をのこ獄舎ふ繋ぎぞ。その日の廳ふ果ふけり有右而朱野
丹三ふ。鄭九郎ば首伏の支の顛末云云と主君義奥ふ怪えあげ。その誡断を請ひ
しば義奥勃然と大く怒りて然るとふい鄭九郎ば此も借すぞ罪戻速ふ梟
首しと都下の悪俗を懲ぎでと敦圉ぎけく下知せろ。これふよりて丹三ふ次の日鄭九
郎ば首を刎て躯く河原ふ梟ふけり然程ふ陶瀬十郎ふ鄭九郎ば悪事のよりを怪えあげしその夜ぞ外ふ出ぞけ
共侶ふ鄭九郎ば悪事のよりを怪えあげしその夜ぞ外ふ出ぞけ

生む虫のこれらとよふ憚りの関を置く。宿所は能り居る程は若黨篠野佐三次が刃瘡終は愈ぎて黄泉の客となりけり。有右面五十日ばかり歴る程ふ。その年肆月の初旬ころべ。有一日朱野丹三が主君の使を奉りて瀬十郎が宿所なる詣来て君命を伝ふ。陶瀬十郎與房事當家第一の老黨なる故房の子ど。ありるばら行状よろしからぬ風聞あり。よりて山口へ返し遣さる。帰著の後も御沙汰あるまでは。伝と慎みをるべ。と厳ふ命せらる。瀬十郎は幸ひふ罪鄭九郎がとりふ帰し。阿夏ばかりの崇いるはれど。身ふ覚ある衒心ふまうし。解くべ死よりもるく大くおそれて言葉多つ。猛ふ旅の准備をす。次の日京師をたち出るる後者ども搭と者多く両三人ふ過ぎりけり。かれが浪速の浦邊より水行を周防へ急ぐとそその日巳の比及ふ。深草の里を過る程ふ京家の侍とおぼゆる人ふ僅ふ一箇の後者を引て茶店ふ尻を掛くるを。今瀬十郎が過るをみて。遠く後者ふ。あらるなさつ。途ふ出しく。

瀬十郎を留めさせ。竊ふ對面せまくほっ。霊妙時立ちるを。とどめ。瀬十郎ふ詳くなるべ。と。隨ふ聽く。茶店ふ近つ。とそれが件の侍ふ見則別人ふらぬ日野西中納言兼顕卿の近習の青侍ふ辛蹈兄四郎寧成とふれた。年来相識るどちふれば。出ふけぞ。とばるふ且歓び且恥さ。床几の傍ふ立ちた。迭ふ寒暖を述ふ。恙を祝し祝さるだも面ぶ。せる。瀬十郎が言を聞ふ也。某ふ口づらふ。越度よりて月ふ無佐能てゆしく。這面周防へ追返さる。悦ふ旅ふれば。猛の首途ふて餘日もるく。四稔以来親心命を兼ふ一方ざるふ。あん辞別の暇ふ。あらば心ふるるくゆしふ圖らばもの処ふて兄と對面しるを。月来ふ本意ふ稲へ。顕卿ふいるくまもるく。恙ふ兄ふ又何ふの所以ふ。ふらを徘徊ふ。稲荷へ詣のふ。欲と問へば兄四郎も亦声を低めて。其がはふ。よ来るべ主君の使を奉ふ。公ふ。あらんるのを寡君并ふ賢房卿のふ。消息も病ふ。なるふ。

ふるつ
ぜ十郎
ぜ十郎

仕ぐ
ぜ十郎
古句
ぜ十郎き
け其の末
くなくなと
ゆく秋哉
出像錦九

あまりに端近く誘ひ入れて母屋に入りて障子の陰に坐をとられ瀬十郎に辞ひよりて近くそばほとりに對ひて登時兄四郎がのたまふの春長公の災難寡君も賢房卿もかの折に偶聞せぬひてあん駭大々言ひ后も左に右に匂ひ合ひ

まだ一度も龍居のよう安くもなく左京兆に憚りて故意安不を詐のみ既に期日ごろ経く長公の周防の山口へ返されぬ起行の風声あく笞えて途に如此々々と空嘯ふ言ひ意を伝へ告ある君命を奉ずく侯上ひ尺寸の寡君のこころで萬里小路賢房卿もあん使を立のみんとて仰合されうけれ者多人数あそこの人視ひ立ちのみ又よせ寄せ合と寡君これを禁めあんと彼卿のあん消息ある某に齎しあり酒あり。翰匣より二通の書簡をとりもて遞与せを瀬十郎に受戴なくこれとく披見をる兼顕卿も賢房卿も共に名残を惜ませの忘れ筆に顕れる。その中に兼顕卿の消息に今より四稔前に比縁昵共亭に空待ちー

のみぢかくるらでありの花をも折れとのいひぬだろう受ーの人行ひを悔ーけれ今ばら恨をられやせん鈍すりの花と書せのふとれば顔且赧うるーせばらるるーせ

やく巻て懐ふうち斂め今ふたりの両卿のあん情ずを辱れ前路を急ぐ旅るれば。あん答書をなる遣ものらば不敬を先立のあらんや只見其所のあん熟成を頼まけるのに

てそとのいやもたや立ちくまるを兄四郎雲時と推禁めくさせる儲ふあらねども君命は依て遥々と殊則たる偏提あり一支盃厚めて袂に分え然ーの日まるの肆月の旅ふいそ

こころと慰めを後者ふ携ーを安ー偏提をひえく薦めーの瀬十郎の感謝ふ堪ずこれ彼共は下戸ならねいかんとそこの不要の數男るも覚ぬまぞ暗譚ずを根ーなる瀬十

郎ハ浄ふ立て天井を遠りて奥まりくる縁頬ふ到く遽ーく生ぞ来る程ら忽地背後よ人ありてあや喃々と呼留るを誰ならんとそれ振ぬ登時阿夏ハ遽ーく瀬十郎を振留め涙さーぐ主戸ひを

携て来ちゃゆく侯ら登時阿夏ハ遽ーく瀬十郎を振留め涙さーぐ主戸ひを

きく喃瀬十郎ゆゑ鄭元郎が大膳亮の間殿なのこれまうあんなのこのあんかや
あらんと思ひひとびく安死心のあるゝに幸ひわく出来もるく紙ぶ甲斐もるる木立ぞ
死なるが中の末も沼遂を搦縄のあるに別れるるとひとりとよと泣沈めば瀬十
郎も嗟嘆とやまで草ゆそるこの誠心を憎ーとそのあるねど親孝すい若氣
徳過世ふ結び悪縁ありとも出ひきたが断らばうんや公廳沙汰脱れても世の風声を
いくわせん主君の御気色宜らそ猛ふ周防へ還さるもたさと情由のあるとの風声
あるふよりそ命るを今ふあふ孝く別を惜を泣口説うばの身の罪を増るのこそ情に
似て情ふあるまれば人視ふ被らぬ間ふ背門より出く出るそれをうばの為ぞう然る
ゆあれるそふふーとけうばあふ立とあとを早くも知りてあらふ在て俟るちん汲引を
考る人のあると同ふ阿夏涙を敏めそあんなのけの首途を昨宵灰ふ焚ふるそ遣
んとおもひ稲荷詣ふ假托く今朝と宿所を出るど穉児を携るる女の歩れ果敢

まらで鄭ふ六の里まぐ来る折認られぬあり認りて伯の西ざる兼頭卿をふの御内人辛
踏ぬのあの茶店ふ憩せるまゆ死遭ぬ窃ふよりを詣ねーふあんなのをあ孝後とる
言無ふの露を没ぬそふ今ゆら隠まふ隠されぞ妾もあんなのふ遣んとそあまを歩る
ようと告ーふ辛踏ぬーの宣ふあう企せとあうれ共伯ふそを彼人ふ遣せるそそぶ
ふ接あるに似く人の批評を脱れくけんそるるふ奥ふ退ぬて便宜もあらば遣ぬ
これい知らばるありちーて外ふそそめとられる人の情の憑ーちふ候ふあるるさ
まで強面く宜らぬとも山海千里を隔てるるあるのくを糸のより添ふも今を限るる
そを諦めく結れども珠之丈いんなのの瀧這眉上の黒子さえ一對るる親子の徴
この児の顔とあんなのの容止似ぬ肖ざるやそれるとのふく鼻紙ふ附うー懐中鏡を
そう出ーて照ーてえせう推向けて珠よそるるこの父ぞる抱れるとを掻遣れ問ふ月
るる珠之丈も爭ひくるる血脈の恩愛父ぞるる噺と呼ばけ携るを躯てうよ

膝ゐ載る瀬十郎歎けばそれ目ゐ脆弱涙欲露の一滴鮮いるくて脇挿の刀よ附る小刀子を遽く拔とり珠之丞が右の手の甲をうゑ左の手の甲に推並べ小刀子の一寸許壓割ゐ砍れば歎とる珠之丞も彼共ゐ手の甲に刺てひきゐる鮮血を瀬十郎い佶と見て寔や親子の兆徴ゆゑ鮮血分れぞ因るとゐ古実をゐ緋一ゑ疑ひ稍解れども只児とのられぬ児の久後名告ゐ日のありもせば只叔姪とのいんのさだれ年長面送れしてそれともうぶん時再會の符契ゐ這ゐの痣ゐ優めゐ金銀珠玉得ぐ死化貝之像見とゐ尺とも喪ひ易ゐ心とのひゐけく墨斗の墨を指ゐ染て珠之丞が手の痣ゐ捐入れば真一字の假墨子ゑ鮮明ゐ成てけり有右而后瀬十郎い腰著の財嚢より圓金十両とり出てこれを阿夏に遽与して左のゐ珠之丞が仮ぎ細小ゑれども珠之丞を養育の為ゐ取ゐる寸志ゑ差べ遽く立ちくまるを掖留る阿夏い涙をうちぬぐひ絆をうけるゐん教諭ゐ久後憑ゐ再會の符契ゐ遺ぐ左のゐん右のゐんと出ひ結ぶ遺ぐ左のゐん右のゐんと出ひ結ぶ東西を稍辨ん比ゐて説示ゐんと出ひ結ぶ遺ぐ左のゐん右のゐんと出ひ結ぶ

ちゐ匂月に支くゐれるゐら近ぎゐうとゐる山梔子の花より脆弱ゐ別れ結ぶ長ゐ旅宿の旦夕の食物ゆもゐをつけて恙もゐ彼地より音耗信ゐてゐれと携乃ゐ袂を振拂へ綻けゐ腋著の糸の紊れのくるくさを見ひ捨てゐ瀬十郎ゐ外面ゐ立出くゐゐ辛踏ゆゐ心とも急ぐ中座の失敬ゐ既ゐ時刻の移りゆゐ盃を納めとゐる兄四郎ゐ現ゐまでも名残い竭ぐゐ古語ゆゑ送君千里須一別とゐ強ゐ要ゐ別れゐ後者を呼立くゐ茶價を茶博士ゐ取ゐ者を呼聚して兄四郎ゐ別を告郷ゆもゐ終ゐまで忘ゐべゐ西帰の日ゐ卑札をゐ人富を中上ゐ向暑ゐ裁ゐ

あらず妻兄も弥納袴の為ふ自愛しめと述て刀を引提て立あがるを先四郎も亦幾條の口誼を舒て目送る程は阿夏は隔亮を寸と閑て出もゐるらぶ外ら送る歎息深草ゐ涙欷露の珠之ゆるるを掖立てぞ立在るこれを一期の別とも知やあらぬ恨あらぬ雲と流ふ水の定なき死人さめぐの江湖上ふ一世の夫婦ありとのべども百年の情人なり偶人情をもくみ事をたぐ女貌郎才憐むべし亦公道をとて論ぜ事ぞ非徳乱行人みな人みも似ぞとの諸くのを噫嘻

第七回

二賊剪徑と父女を屠る
一妻羞を忍く両雛言を役よ

再説鄭九郎が親ゐりける三條西町の庖丁酒賈池澄屋亀六を憎とゐど獨子に後れゐりける哀傷悲泣ふ亦ゐぐらもあら彼りけり現鄭九郎が短慮浅計恨むず死人を怨ぞ可惜命を隕せゐる自業自得とゐひるぐら初を推せが借盃ゐ。

阿夏より支起りゐ。されぐそおれ世の風聞ゆも彼陶生と情由あるーと鄭九郎が娼くゐ罪を釀ゐ身を殺ゐ獨没ふゐるゐと人命ゐが虚説ゐらば恨めの淫婦や形ゐのりぐ刃やとのゐれど胸ふ燃る火の焦せゐれが折ふ觸て木偶奴と追立ゐやと必ゐのつゐーよゐ微賃ゐンども常ふ変ゐく債ゐと苛刻く阿夏と面を對ーても睨詰て辭を被けも胡越の思ひを為ゐめゐら木偶奴が愚魯ゐる事情をゐも考ゐねど人の噂を洩ゐーゐる瀬十郎が言の趣今ゐら半信半疑ーとゐれ狡と思ひ合ゐるゐの言ふゐもあら彼ゐふ彼美男子ふ故ゐやあけん周防の山口へゐゐ発と告ゐる人ゐ乃あるふゐゐ。そゐゐふ後安く言れども母屋のあーと亀六ゐ乃者猛ゐ氣色立て跳ゐ紀愉ゐゐも況や口の祥ゐゐける人の噂の耳ふ障ゐ京師ふ住も果ゐゐ鎌倉京ふ芳ゐ敏華の都會ゐーゐ彼地も亦兵火ゐ荒て豆両管領山内家と扇谷殿と睦ーゐ賸伊豆相摸ゐ北條殿と戦ひ年々ふ絶ぞもあれば今ゐ

昔の鎌倉に似るべくもあらざれど然とても生活の便著るしとなべてらば彼地に移り住むるらば又住事のるらんにやと思ひ起しつ云云と阿夏に告く相譚ひ〻と阿夏宮も思ふやうや京師に住果るとも〻るつ〻とのこと思ふ瀬十郎ぬしよ遠くとのゆもあらば世間男姑の咏り給よ他郷に移らば人改そるべくよ後世もるべ〻と尋思るつ〻一議よ及ばるべ妻も考べ思ひ給るにつく准備るべとのよ木偶欠敷ひく家材雑具ハ送もるべ活却しく盤纏とつ行装を整へるその日借屋を亀六に返し七四隣合壁に別を告今茲九才に成る小夏と三才に成る珠之丈を肩ひもしあるせもし七夫婦父子すべて四人の年捌月の下浣に東を投て起行る東海道いとの春より処々に戰に絶て新関も亦設るに豫て答へられ岐阻路をよりめれそこの日ハ七八里の路を辿て守山に驛に宿るを投めるにて第三日の未の比に磨鍼嶺を越んとを然でも折く行艱む。

女兒に夏ぐるを抜扶けて珠之丈を背負ふる夫婦が辛苦いふ〻るもあらば急ぐと

れど男取くらぬ山路八人の往還稀る下晡に成る隨に茅萱小篠原に聚く虫の声も高峰に近づく程そもれ一叢敏き樹柱の間より顕れ出る両箇の癖者身長五尺七八寸一箇ハ六尺ゆも及べ一蓬頭巾に胴金作の巨刀腰に苛めり打扮ハ何でも考る彼張樊が儔るらぬ関の太郎が子孫るらんと思ふも僻目に成ざりける當下両箇の癖者ハ先後に立塞りく欲に郷音く声を張り立ててれ行客騒ぐ為せを多く寡の知れる盤纏身皮骨折甲斐のあらば上思ひと抄枯比の酒價ハ高さのを捨ぬ東西に成もあらば。とく脱ぎ。と左右方齊一刀を昆りと引抜ば吐嗟と叫ぶ女房女児と共に魂銷る木偶欠へ歯牙も合ず戦慄れく胥うち脱ゑを抗て嘻見山の高家君達やよ俺ハ京師に世渡る楫が廻らねば世帯平せ倉卒廻国路費とのふ〻ハ少ハ懐貯限り進せん衣嵩衣ハ〻ハ〻と賠ふ腰を搔捞く稍とり出を連婚銭を両箇の賊ハ〻ハ〻もせで眼を瞪らを声

ぐく丸
あるつ
ぐく丸

木偶丸小夏を結果て二賊
阿太尊
小るつ
ぐく丸
るの丸
あるつ

高ふ。一文野郎が諄々と惑ひを誰が聴ん。覚期をせよ。諸声が罵も終らぬ蹴倒して起んと春蚯蚓の項を踏へて。ひたぶる剥ぎ衣物と腰を纏ひ財嚢も漏さぬ奪ふとなる堪るか。阿夏小夏が吐嗟と叫び。携禁んとすれども。眦嗜くよ附ひ。猶寅縁りて蹶天ぶ。小夏が項上掻抓む。一箇の山賊胴声悍く。這女の子奴が懲むまふ妨まれと敦圉く。宙まり揚げ手玉を弄く。矢声を被て投擲せ。憐むべ是這小夏が底迴る深谷の中が身と翻陷て。ひたぶる沼ぶ。既ゆく木偶が今眼前な女児小夏と投喪せ。能ふ堪へず身を命も惜ばぞ。ぶ子の寃讎と呼ぶて立あがり抓かさて。一箇の賊が罵れ。拉んとまでなる。転蓬ぶると又蹴倒して。起ても立ず礪と砍る刃の冴る木偶が。苦と一声叫びもあへず。肩失より乳の下まで。韓竹割の身が赤裸。奄運ぶ。紐より短ぶこの世の別路。命墓るなりけり。阿夏が女児と良人は

枉死ぶそのの刃も生るが地せぬ。今ぶ逃ても脱さと思べいとで弱り果て共憂泣く。珠之丈を抱ぶ締め眼を閉く。年来信ぶる観世音の冥助を祷と。生縛心命念誦ふ他事もなくけり。登時両箇の山賊が木偶が亡骸を又谷底へ蹴落して。刃と鞘る袖埃ぶ。しく拂ひて。徐々と。阿夏が身邊ぶ立よりて右ひだりよりやよ女汝が殺さぬ。怕れ給せぬ花のそのバ八重樓月が壁べ十六夜の色の香も匂ふ女房盛りを。惜ぶ。惜ぶまいとぶ。むざやかりのぶ死ぶ。せぬ振拂ひて。噫狎々。殺さば殺せ。生さぬ中でも小夏が女児良人も共が命を隕せ。その仇人が伴ぶてやとのせもあるぶ。両人齊一足踏鳴らし。冷笑ひて顔依げるく強情張て。適とのべ活もせぬ殺やぶ。憂目とぶ。這餓鬼奴と右ぶ。賊が跳りあがる。珠之丈が矢庭が抵合る。就鳥抓ぶ。噛哀やと声立て。携る阿夏ぶ。さぶ。左ぶの賊が掠ぶ。動ぶ。當下衣

立ち賊の駭怕れく泣入るばかりなる足を叫掻く珠之丞を目上高くさし揚て
やよ見女これをそよ俺們両箇の御あるを役へ下とのべ詞も語も用ら必今との
餓鬼餓鬼谷底へ小女良とあるど立なせんを安く思案を切替て俺們さるのはこの
役へ親も子も魚肉で美飯の年中安樂否欲応欲と左右より邪魔で口
説く小児を質種回報をとるが存亡の堺と思へば口隱る母の歎と子の叫び
冥土の呵責磨鉞の名れ眉けん劍の山紅蓮の涙焦熱の湯と形るすぐよ
つくりもるを阿夏い裏く胸を鎮めく涙の間よ思ふ今然を述て手ふとくも
両箇の雛言を數ゆもあらん又徒れ親も子も殺されて何の益のあらんなるを
こまられかくもあれ偶挙げ一男児の珠之丞ばかり恙もるくい年長成人る後に然
復をとすがもあらん歌舞伎ゆもまるる常盤前い子のる仇れ役ひ一例もあるを
いつでれこそるの思慮るるらべきい這身ひとりを両箇の男れ任まるへ宿遊

女ゆも然ひ恥られども時の要あり臭も臭つぶ刃い只今この山路あて殺され
ゆをと思ひるべ何ん獣ふとのあるべ吁介るりと肚裡ふ尋思をく涙を飲めて彼
方此方の両箇の賊をうち向上又不くりそ噛刀祢達宮那瑳り死るあ谷底へ
投一投ゆ喪れり継子ゆくその穉児い血をりけ一つぶ刃勝るれあらねども地と支
流獣天飛ぶ鳥も子ゆるま迷い及りのあらんや今よりこそ
るべれとるゆ背くべ命を助けの人弘とるゆ欲ぶ両箇の山賊さや珠之丞を杠面
あそ泣ぶく。と頭を搖り背柄ゆ遠ーく阿夏ゆ遠ーく目を細ゆうち合
笑を通怜悧紀女房るる路傍の芒背門の柳靡なく損のるべるれ今より
あく俺們を慰めるべこの子い俺們両箇の児と親るるを疎ふせんやあく
あれども機を緩さーて脱走らんと謀るゆあらるを
哩と當く知るるそこの腰ゆも十両あり且その金を預けるーとのひく航く左

右より出せる長財嚢の珠之丈の為ふとく瀬十郎は一の賊の せ一置土産
る金をもれば夫ふとり深く隠しとのて来りしものを情なやとらるまられぬ阿容てい
と取られて惜しげもなくるのを亦せん術なくるけり。却説両箇の山賊ら木偶人形行李と
衣裳を取て肩ふうち被阿夏親子たちそれ立て何処とうく伴ふ程ふ幾もあるそ只
暮るとこの地ハ總く山又山の羊腸たる細道を辿るもくるー蘿蔓松柏枝まさ
樹下弥闇く嵒石道ふ横りて樵路言ふ滑るり。仰ぎて蒼天を瞻れば閃々たる星の
光ま夜風の秋既ふ深るり。俯て山河を渡るとる滔々たる水の音ふ壺折ふ裳を濡し
と。本邦の大江山唐土の白猿傳鬼魅妖怪ふ捉られる良家の婦女子もくあり
けんと思ふ阿夏ハ気ふ難きて岩根ふ身を倚せ樹幹ふ携りて動もとれば後ふ一
箇の賊ハ色を合りて腰を推て扶掖ふ又一箇の賊ハ珠之丈を扛抱ふて声をけて叱
撲。左右ふ感めて彷徨り有如之程ふ時移りて天ハ未明ふとる比ふ這両賊が

巣穴ふ来たるり登時阿夏ハ彼此と頭を回りて家の先豆京をるふ素朴の柱宮の
檐月漏て宿ふ宿ふ素豆何人ふ住捨て道場ふ化て菴室ふり庵温ハ見えて
水を引て坐席ハ庭を旨とて天然の風景ふり家具調度いべゆらて夜物まで揃
羅を竭せハ何地の豪家の所蔵るけん大約その為体彼金山ハ洞欲と思へハ亦
支黨ふ為ふ膳吹の鬼の宿るらぶハ袴無保輔の隠宅ふ似るるー然程ふ
件の二賊ハ阿夏珠之丈を勧て奥ふ入る処ふ休ふ早飯を炊ぎて叮嚀ふ
暫待て抑ハ山賊の一箇ハ十ら鬼夜行太と呼れ一箇ハ野干主黒三と呼れ
初ハ肥後の飯田山ふ川角頭太連盈ふて下るり比ふ連盈ハ永正六年九
春の比備中丈弘元ふ捕捕れて支黨ふ為ふ討滅れるーとの夜行太
と黒三のみ辛く討ふ鉾頭を殺脱て遠く近江路ふ落通り坂田郡佛生山の奥
深く巣穴を占て三年以来ふ然ハ這地方ハ磨鉞中山吾谷佛生と連

山波濤の如く聳立て樵夫も到らぬ嶮峻幾くり住人とても紀山の鳥路熊径崖峨と一亡音つくめく松ふく風伴いのの白雲の外の尉むよりもあるべ有右而夜行太黒三のをく街頭の立て行なと前徑ん又あと彼の里間に入て民屋を拝奪おく浮世雲の富を欲しと跡ゞ栄華を羨さる残忍非恨の癖者なれだ。住所深山人家遠く出没定らざれ。おれを知るのみ夜行太ホ。阿夏が傳ヨクら思美女ちるとて始く教びまつその素性を詳ふ勢ひ恁地ゞれ阿夏の隠さとゝるぞ。京師の歌妓ありけるよりを明々地に報ーかゞ二箇の賊の商量しと次の日何の里ゆち。琉紫琴三弦ゞどと窃とる西種ゞ阿夏に授けて鼓せ歌せ。時を酒の敵みとゝ見ての遊興のとき。黒三が宿所はとゝ思日の阿夏と夜行太が妻ホ。又夜行太がとゝ彼の黒ゞ妻ゆゝも磁言ゞ見て西箇の犬の孤牝を愛して相似て浅ま。

有繋ゞ見のいと惜けれ。阿夏のとれとゝ推辞よりて逃去らんと欲されども夜行太と黒三と迭代の宿所ゆれ。ゆゝ便りとゝ思ゆゝ些の誘ありとゝも山深く遠く道遠く何方を人家ある処ゞと豫て考られゞ恐ゆゝ出路よ迷ゞて程ゆく追詰られ引戻さるゝ三もゆゝ。ぶうくのゝ殺珠之丈ゞ命も保ちゆゝ。ゆゝ生ゆゝ者ある山賊のゝも良人の冤讐言ゞ二人の為ホ身を潰され。調戯のゝとゝるゝ抑甚麼ゞ悪業ゞも好ーゆゝ。ゆゝまでゆゝ。ゆゝ岐道ゆけて瀬ゞ郎ゆゝと浅ゞ契ゞ罪の報ゆゝ。ゆゝ活る地獄ホ陥ゞ世ゞ薄命ゞる女ゞゆれどゝゞ多ゞゆゝ。ゆゝ過来ゆゝ。ゆゝ脳ゆゝ秋の山ゞ牝栗屋ゞ恨ゆゝ。ゆゝ離色ホゆゝ暮顔憂ゞに覊されゞ捨ゞ。身ゞ果ゞゆれゞ。ゆゝ訪人絶ゞゞゞ甲竟何夏ゞ這窮死の後の話説ゆゝゞゞ次の巻ゞ。解分ゞを聴ね。

近世説美少年録第一輯巻之四終